





その後、実習室に移動し、実際に「シナリオ」というシミュレーターモデル人形を使って、演習しました。

ここでは、対象の状態を把握するために必要なシステムレビュー(問診)やフィジカルイグザミネーション(視診・触診・打診・聴診)を行います。グループで話し合い、どのように声をかけ、どのようにするのか具体的に話し合いました。

教員は、自主的に学習が進められるよう、学生らに発問をします。それによりグループでの学びあいを促進しています。

学生から何を収集するか発表してもらう場面では、「なぜその情報が必要か」を教員が確認したうえで、わかりやすく意味づけしています。

学生が実際に聴診器を使い、肺音、心音を聴診しました。患者さんにどのように声をかけるか考えることも大切な学びになります。



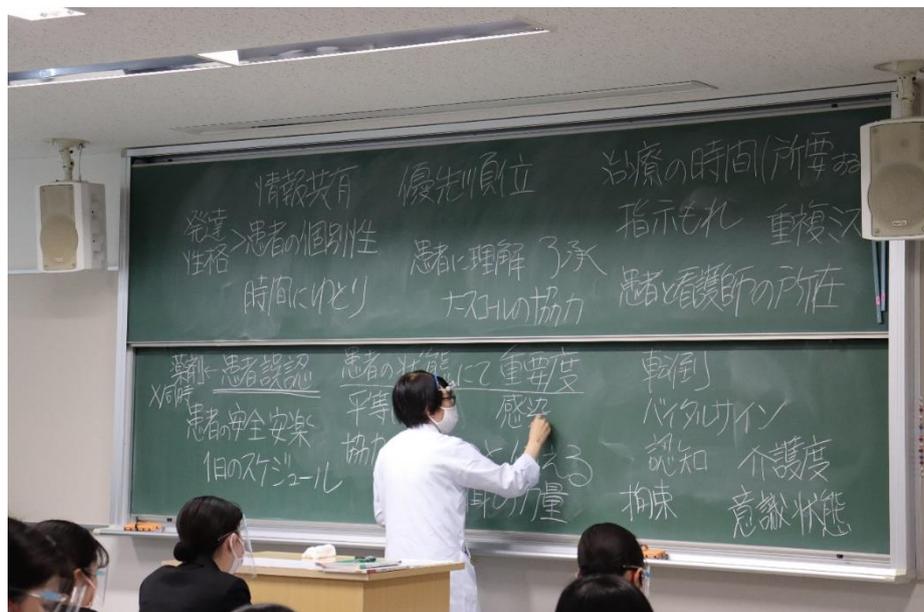
学生が発表した内容を、教員は振り返りながら、知識の定着を促進させていました。

複数グループのシステムレビュー、フィジカルイグザミネーションの発表から、総合的に考えられるよう教員は助言を行っていました。また、教員からは締めくくりとして、病態のメカニズムなど基本的な知識を活用すること、目的を持って情報収集すること、得た情報から何が言えるのかを考えて援助に役立てることを伝えていました。



優先順位を考える根拠についてグループワークの発表をしています。学生からは、生命の影響や安全面への影響を考慮することや患者自身の苦痛を考慮するなどの意見がありました。

統合実習では複数患者を受け持つことになりましたが、これまでの実習で看護師はどのように動いていたのかを想起し、受け持つ際の留意点についてもグループワークをしました。



学生からは、複数患者の身体的、精神的側面の情報について優先順位を考慮して収集すること、複数患者の検査等の時間や業務に要する所要時間等、時間管理をする必要性について意見がありました。

教員は学生の意見をもとに、今後実習で具体的に考え、実践につながるよう助言していました。

学生はこれまで受け持った患者やかかわった看護師から多くのことを吸収しており、積極的な意見交換がありました。3年間の実習の経験が活かされたグループワーク及び発表でした。

